

第5回
市民参加の仕組みづくりのための検討会

会 議 録

日 時：2026年3月31日（火）午前10時開会
場 所：札幌市役所本庁舎 12階 3・4号会議室

◎開 会

○事務局（藤田推進係長） お時間となりましたので、第5回市民参加の仕組みづくりのための検討会を開催いたします。

事務局の藤田です。どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、お手元の次第に沿って進めたいと思います。

次第1の議事からは座長に進行をお願いしたいと思います。

鈴木座長、よろしくお願ひいたします。

1. 議 事

○鈴木座長 皆様、おはようございます。

座長を仰せつかっております鈴木と申します。

本日も私のほうで議事進行を務めさせていただきますので、よろしくお願ひいたします。

それでは、次第に沿って進めてまいります。

前回2月10日開催の第4回検討会では、2月に開催の第2回市民ワークショップの進め方や、市民参加を支える仕組みとして市民ファシリテーター育成の検討状況について意見交換を行いました。

本日はまず、(1)第2回市民ワークショップの開催結果についてご報告をいただきます。

それでは、事務局より資料の説明をお願いいたします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 事務局の寺川です。

年度末の最終日にもかかわらず、ご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

それでは、資料1に基づき、第2回市民ワークショップの結果についてご説明させていただきます。

資料の構成といたしましては、ワークショップの全体像、参加者の属性、三つの論点に関する議論の結果、運営に関する評価とワークショップで出されたアイデアとなっております。

まず、1ページ目をご覧ください。ワークショップの全体像でございます。

左側の開催概要のうち、一番上の目的ですが、持続可能な雪対策の方向性ということで、特に生活道路の除排雪の在り方について市民議論を行っていただくことと、2点目として、多様な意見を引き出す議論のフレームを構築することでございます。

このほか、概要につきましては、前回の会議でおおむねご報告済みですので、説明は割愛させていただきますが、論点の部分について改めてご確認いただければと思います。

三つの論点を設定しておりまして、1点目は、生活道路の雪対策についてどの方向性で進めていくのがよいかで、シナリオをご用意し、そちらを意識していただくというものです。2点目は、冬の生活道路の環境について何を大切にしたいかで、住民としての優先度の明確化を目指すものです。3点目は、行政と地域がどのように役割分担を行いながら進めるのがよいかで、特に、地域への支援メニューの具体化を狙いとしたものです。

右側に移りまして、当日の流れです。

こちらは、前回のワークショップと同様に、まず、受付、情報提供を行いまして、同世代、後半は多世代に分かれてディスカッションを行い、最後に振り返りという形式にしております。

その右側にお示ししているのが今回取り入れた主な工夫ですが、上から順に、アンケートとして今回も3回の意識変化を調査しております。

次に、情報提供につきましては、情報量を考慮し、2回に分割しております。1回目は、人口減少、財政状況、雪対策の現状と課題という一般的な内容をお伝えし、2回目は、後半の多世代ディスカッションの前に生活道路の雪対策のインプットを中心に行っております。本資料上、情報提供後のアンケートをT2としておりますのは、1回目の情報提供の一般的な内容のことを指しておりますので、この点をご承知おきください。

その下の同世代ディスカッションとしましては、「雪のある暮らしの将来イメージと大切にしたいこと」、多世代では、「みんなで考える冬の生活道路のこれから」ということでそれぞれ議論をしていただき、最終的に冬の生活道路のあるべき姿をまとめたという流れでございます。

次に、2ページ目をご覧ください。参加者の属性についてです。

今シーズンは、特に大雪に直面した直後ということもあってか、道路環境への満足度が低い方々に多くご参加いただいたことが特徴であったと言えます。

左側の概要欄ですが、まず、参加者につきましては10代から70代の市民43名にご参加いただきました。欠席は10代を除いて1名から2名いらっしゃいましたが、10代につきましては、申込みも多かったことに加え、当日も全員にご参加いただきました。

次に、町内会に加入している方の割合についてもご要望をいただいていたので、調査をしましたところ、8割弱でした。

居住形態につきましては、戸建てと集合住宅でそれぞれ約5割ずつで、集合住宅のほうがやや多いという結果であります。

冬の主な移動手段につきましては、自家用車中心と地下鉄中心がともに約3割ずつという結果です。

また、冒頭で申し上げましたとおり、冬期道路環境に不満を持つ方が多く、約5割を占めております。

市政に意見を言う頻度につきましては、市政に意見を全く言ったことがない方が約6割という結果でございました。

最後に、長く積雪寒冷地に住んでいる方が中心であり、20年以上居住している方が約7割というのが参加者の属性です。

次に、3ページ目をご覧ください。

ここからは、三つの論点の議論の結果についてご説明したいと思います。

まず、論点①生活道路の雪対策について、どの方向性を進めるのがよいかでございます。

左側の設問の欄をご覧ください。

Q1では、生活道路の雪対策について、四つのシナリオのメリット、デメリットを読んでいただき、どの程度、賛成するかということを7段階で評価していただいたものです。

中央上段のシナリオ賛成度のグラフをご覧ください。

シナリオにつきましては、Aがパートナーシップ排雪の水準を全域に届ける、Bがパートナーシップ排雪を継続する、Cが水準を抑制した行政による排雪を行う、Dが排雪を行わないの四つです。

結果としましては、議論前では青色のAとオレンジ色のBが最も高い数字でしたが、議論後には、Aは賛成度がやや低下、Bは変わらないというものでした。

その一方で、グレーのCへの賛成度が増加し、最終的にはCが全シナリオで最も高い賛成度となっております。

次に、Q2のシナリオの支持ですが、中央のグラフをご覧ください。

議論前は、Bが約4割で最多の支持を集めておりましたが、議論後には大きく減少したという結果です。対照的に、グレーのCの支持が最初の23.3%から議論後には44.2%へと2倍近く増えており、最終的に最も多く支持されたという結果であります。

下段のQ3は、シナリオのうち、最も受け入れにくいデメリットを選んでいただいたものでございます。

選択肢aは雪対策予算が大幅に増える、bは実施地域においては金銭的な負担が伴う、cは雪対策の予算が増える、dは雪山がシーズン中残り、見通しが悪いなどでございます。

結果としましては、緑色のdの見通しが悪いことなどを最も受け入れにくいデメリットとする回答が最も多く、開始前から比べてやや増加しているという結果です。

青色のaの雪対策予算の増加のデメリットなども議論を通じてやや増加し、2割近い形になっております。

一方で、bの費用負担の格差やcのデメリットにつきましては、いずれも議論を通じて減少しております。

このシナリオ支持の変化の背景ですが、推測するに、まず、bの支持が減った要因としましては、当日の議論などを観察しますと、町内会の担い手不足や加入率の低下が多くグループで指摘されており、そもそも、今のパートナーシップ排雪の仕組みがこの先も続けられるのかといった不安が広がったことが考えられます。

aの支持が減った要因としましては、情報提供の中で財政的な制約などをお伝えし、議論を通じて他の行政サービスへの影響が具体的に語られ、このような結果に至ったのではないかと見ております。その結果、bやaの支持が高かったのですが、最終的にはcがやや現実的といえますか、選択肢として選ばれたという考えを持つに至っております。

cにつきましては、排雪水準が下がるというデメリットもございましたが、地域で協力しながら補っていけないのではないかとという意見も議論の中で出されておりましたので、工夫によって対応できる課題として受け止められた面もあると解釈しております。

続きまして、4ページ目をご覧ください。

論点②冬の生活道路の環境について、何を大切にしたいかです。

Q4では、これからの生活道路の雪対策を考える上で、四つの視点についてどの程度重視すべきかということで、7段階で評価をさせていただいております。選択肢は、持続可能性、公平性、市民負担の少なさ、移動の円滑さとなっております。

左側の囲みの中の参考の部分ですけれども、市民負担の少なさとは、市民が生活道路の排雪のために支払うお金や雪かきなどの作業負担が少ないことで、当日もこちらをお示した上でご回答をいただいております。

中央のグラフをご覧いただきたいのですが、結果としましては、青色のaの持続可能性を重視する意見が一貫して最も多く、議論を通じても上昇しているという結果となっております。

支持が一番少なかったのが市民負担の少なさで、この結果から、参加者としては、必ずしも市民の負担が少なくあるべきということではなく、持続可能性を基盤にしながらもある程度の負担は受け入れてもよいというお考えをお持ちであったのではないかと推測しているところでございます。

次に、下段のQ5ですが、生活道路の冬期道路環境で優先すべき項目を一つ選んでいただいたものであります。

選択肢としましては、aがすれ違いのしやすさ、bが路面の凹凸・わだちの少なさ（通行路面）、cが交差点部分の見通しのよさ（雪山の高さ）、dがその他でございます。

結果としましては、オレンジ色のbの路面の凹凸・わだちの少なさ（通行路面）が約4割と最も多く、議論後も僅かに増加したという結果でございます。

一方で、青色のaのすれ違いのしやすさはやや減少しているのが特徴です。

この結果から、通行の幅よりも路面の状況への対応が重視されたと捉えられ、日常的な路面の歩きやすさや走行のしやすさといったことが一番の困りごとであり、ここに重点的に対応してほしいということの表れだったのではないかと考えております。

このように、持続可能性を基盤としながらも、具体的な生活道路の課題としましては、路面のわだちの解消を最優先に求めているという結果ですので、今後の雪対策の方向性を検討する上でも参考になるのではないかと考えているところでございます。

次に、5ページ目の論点③行政と地域がどのように役割分担を行いながら進めるのがよいかです。

上段のQ6ですが、雪対策の役割分担について、1が行政が中心に担うべき、7が地域が中心に担うべきという軸でございまして、7段階で評価をさせていただいております。

中央上段のグラフに結果を示してございまして、議論前は緑色の4の行政と地域で分担が過半数を占めておりましたが、議論後にはこの割合が44.2%まで減少しております。代わりに、左手のほうが行政が中心に担うべきというお考えですけれども、1から3というご回答がやや増加し、合わせますと最終的には約4割程度に至っております。

このことは、先ほどのシナリオCの行政による排雪に支持が集まったことと連動しているのではないかと考えられ、行政への期待感もやや高まった側面があったのではないかと考えているところでございます。

次に、中段のQ7、市が優先して進めるべき地域支援メニューです。

こちらは一つだけ選択をさせていただいたもので、選択肢としては、aが雪置き場の確保、bが除雪用具の貸出し、cが融雪設備の設置に関する支援、dが除雪ボランティア支援、eが除排雪の担い手確保、fがその他でございます。

結果としましては、議論前はグレーのcの融雪設備の設置に関する支援が3割程度と最多で

したが、議論後には減少し、代わりに青色の a の雪置き場の確保が最も多くなっておりま

す。この結果から、融雪設備などを整備するより、今ある雪置き場や緑色の d のボランティア支援といったことも支持が高まっており、より身近な対策を進めることに支持が移っているのではないかと推測しているところでございます。

最後に、下段の Q 8 ですが、地域の生活道路の雪対策への協力として 7 段階で評価をいただいております。

これからご自身ができる範囲で協力をしたいと思いませんかという設問で、結果としましては、中央のグラフをご覧いただきたいのですが、議論を通じて、緑色の 4 のどちらともいえなという選択肢が減少し、右側が協力したいという傾向ですけれども、黒色の 7 のぜひ協力したいというご回答が増加しており、5 や 6 のご回答も足しますと、協力したいという意向の方が圧倒的に多い結果になっております。

これまでの結果を踏まえ、行政の排雪水準を抑制しつつも、住民自身が協力して地域の雪対策を担っていくべきではないかということに共感が広まったのではないかと推測しているところで

す。

続きまして、6 ページ目をご覧ください。

運営に関する評価として数字を羅列していますが、こちらは情報提供や運営に関する評価を 7 段階で測定した結果をまとめているものです。

ポイントを絞り、太字部分や網かけをしている点についてご説明させていただきたいと思

います。まず、情報提供に関する項目が上から 5 項目ございますけれども、事前に送付された情報共有ノートの内容は分かりやすかったという太字の項目が平均値で 5.7 とこの中では高い評価になって

おります。今回は生活道路の雪対策という少し専門的なテーマでしたので、なるべく事前資料を分かりやすく作成することに力を注ぎ、その結果が数値に表れたのではないかと考えているところで

ございます。次に、意識変化に関する項目であります。除雪・排雪の担い手不足の実情を知り、市民の協力や意識を変える必要性を感じたという太字の項目が平均 6.1 とこの分類の中では最も高い

値となっております。前回のワークショップでも同様に高い傾向が示されておりまして、担い手が減っているという事実が、例えば、財政的な制約や技術革新の導入に時間がかかるといったことよりも意識変化に影

響を与える可能性が高いのではないかと考えているところで

す。それから、運営全般の項目ですが、緑色の網かけ部分が平均値で 6.3 というので、他の項目と比較して最も高い数字であることを示しております。

この項目としましては、同世代、多世代のグループディスカッションに関わるものと、一番下は、今回のようなワークショップに参加する機会があればまた参加したいというようなご意向をお聞きしているもので

す。今回は、多世代のディスカッションが同世代のディスカッションに比べて平均値が低いという傾向がありましたが、今回はそのような傾向も見られず、いずれも 6.2、6.3 という数字にな

っております。

これらの結果から、様々な工夫を取り入れましたけれども、ワークショップの運営手法とし

ては一定の効果が確認できたものと考えているところでござい

ます。次に、7 ページ目をご覧ください。ワークショップで出されたアイデアをまとめたものです。参加者のアイデアを整理し、右側にありますように大きく三つの方向性としてまとめております。1 が個人の意識・協力、2 が支え合う仕組み、3 が多様な財源と技術の活用でござい

ます。まず、左側の項目ですけれども、個人の意識・協力に関しましては、上から、例えば、自宅前の歩道や道路は各家庭でできる範囲できれいにす

る、自宅前だけではなく、職場前など身近な場所の除雪に取り組むといったマナーやルールに関する意見が出されて

ワークショップと同様に、マッチングで除雪支援が必要な人と支援できる人のニーズを一致させるといったアイデアが出されたところでございます。

三つ目の多様な財源と技術の活用の項目でございまして、ふるさと納税、宿泊税、クラウドファンディングなどで財源を確保する、ワンコイン程度の市民負担で雪対策財源をつくるという具体的なご意見が共有されたところでございます。

こうしたアイデアは一部ですけれども、先ほどの論点でも明確になったとおり、自分も協力したいというご意向が高まる結果となりましたので、ここに出されたアイデアも個人で何かできることはないかと具体的にお考えをいただいた結果だと受け止めております。

続きまして、8ページ目をご覧ください。

こちらが三つの論点を通じてまとめたものでございまして、これまでご説明してきたとおりです。

中央の青字部分が各論点の結論に当たりますので、読み上げさせていただきます。

まず、論点①ですが、議論を通じ、水準を抑制した行政による排雪への支持が増加したというのが主な結果でございました。論点②は、持続可能性を基盤にしながらも、具体的な道路環境としては、路面の凹凸やわだちの解消を求めるという結果になっております。論点③は、行政が中心に雪対策を担っていくべきという傾向がやや増加しながらも、参加者自身の自分ができることへの協力意向も前向きに変化しているという結果が得られております。

これらの結果から、ワークショップにおける冬の生活道路のこれからの姿のイメージを右側にお示ししております。シナリオCを軸にしながら、個人の意識・協力や支え合う仕組み、多様な財源と技術の活用、これらの三つをバランスよく組み合わせっていくという姿です。

以上が第2回ワークショップの結果でございます。

今回は、生活道路の除排雪という具体的なテーマを設定し、シナリオの比較や役割分担の議論を通じて参加者の意識が変化していく過程を観察することができました。

委員の皆様には、生活道路の雪対策の方向性に関するワークショップの結果につきまして、ご意見やご感想、議論のフレームに対する評価などをぜひ頂戴したいと考えております。

今後の予定ですが、今回のワークショップの概要につきましては、これまでと同様に広報さっぽろなどを通じて周知を図ってまいりたいのと、今後の雪対策審議会へのご報告も考えていきたいと思っております。

最後に、ワークショップのご報告とは少し離れるのですが、9ページ目をご覧ください、参考資料として、地域におけるマッチングの取組を試行したことをご報告させていただきたいと思っております。

まず、概要ですが、これまで実施してまいりましたワークショップにおいて、除雪支援が必要な人と支援できる人をアプリなどでマッチングするというアイデアが毎回出されておりました。このアイデアを具体化するために、町内会の除雪作業などを支援する取組として試行してみたとところでございます。

このアイデアを具体化するために、短時間、単発の雇用契約を仲介する民間のマッチングサービスのタイミーを活用し、スポットワーカーを募集したという内容で、札幌市と株式会社タイミーが事業連携協定を締結していることから実現したものでございます。

左下に取組内容を記載しておりますが、実施日が3月15日日曜日、募集人数が4人、時間が2時間、作業内容は、町内会が管理するごみステーション、倉庫周辺などの除雪、ごみ拾いということで募集をしましたところ、約6時間程度ですぐに募集が埋まり、マッチングサービスを活用することにより、迅速な人員確保ができることが確認できました。

右側に3点まとめており、2点目ですけれども、今回、スポットワーカーの応募のきっかけとしては、中央にグラフでお示ししておりますが、勤務地の近さやちょうどいい作業・時間が重視されており、本事例におきましては、地域内での除雪支援を求める町内会と身近な場所で短時間で働きたいというニーズが一致したと見ております。

3点目ですが、本取組においては、ふだんは地域活動に参加経験の少ない方が参加されることが分かっており、地域活動の担い手の今後に向けた発掘につながる可能性が示唆されたのではないかと考えております。

実は、今回はマッチングの取組を2回試行しており、1回目は3月15日、2回目は3月26日

に実施しております。資料への掲載は間に合わなかったのですが、2回目の取組も先日行ったところでございます。別の町内会を対象に、雪が解けてしまっておりまして、作業内容としては、冬のうちにまかれた滑り止めの砂が道路にたくさんあるということで、道路の清掃作業を主に実施していただきました。

こちら募集開始から大体3時間から4時間程度で4名に集まっていただきました。2回とも短時間で人が集まったことと、ふだんは地域の活動に参加していない方がほとんどだったことが分かっており、今後、地域活動の人手不足を補う手段の一つとして活用の幅が広がっていく可能性があるのではないかと考えているところでございます。

説明は以上でございます。

○鈴木座長 ただいまの説明、ご報告に関しまして、委員の皆様からご質問やご意見、また、お気づきの点や感想でも結構ですので、お願いいたします。

○梶井委員 1回目の市民ワークショップの結果と比べると、1回目は意識変容や行動変容が割とはっきり出たので、ちょっとドラマチックな結果だったなということで分かりやすかったのですが、今回のほうが少し複雑になって、ちょっと解釈が必要なのかなと思えました。

水準を抑制しながらも行政中心というポイントが増えたというのは、そうか、やっぱり行政中心なのかと思いましたが、読んでいくと、先ほども解説していただいたように、ボランティアで自分たちもできることはやりたいということも増えているということでした。

全体を通して見ると、行政中心というところで意図されているポイントは何かというと、平等性かなという感じがします。平等という言葉は出てきていなくて、公平性という言葉が出てきていましたけれども、私は平等と言ったほうがいいと思います。あそこの地域はパートナーシップに契約しているから除排雪が進んでいる、うちの町内会は契約をしていないから進まないとか、そういう不平等ではなく、最低限の平等性は行政で担保してもらいたいという、むしろ平等を大事にした結果かなと。そういうふうを読むと、全体が読みやすいかなと感じたところです。

でも、なかなか緻密におやりいただいて、興味深かった結果だったと思います。

○鈴木座長 まさに梶井委員がおっしゃるとおりだと思います。

今回は1回目と2回目で時期が異なっており、より現実的と申しますか、大雪を目の前にして、平等は担保しつつ、行政にも最低限は担っていただき、自分たちでできることはするというふうにつながったと私も思っておりました。

そのほか、ご意見やご質問等がございましたらお願いいたします。

○山崎委員 ある意味、理想的な結果が出たことがよく分かりました。

水準を抑制した行政による排雪に対する賛成度が増えていったことや市民の行動変容の部分については、いろいろなデータを示してもらい、なぜかというのは今の寺川係長のお話で分かりました。

改めてお伺いしたいのですが、担い手がいません、お金もどんどん足りなくなってきましたというふうに、ない袖は振れませんというのが一番効いているのか、みんなで議論をして、議論の合意を経た上でそうしたことになったのか、あるいは、それと重なるのですが、個人の考え方や価値観がいろいろな意味で変わったということなのか、その辺はどうでしょうか。

我々の議論は、一步間違えると、ない袖は振れないのだから我慢してくださいみたいなことを市民に押しつけるような形になりかねないので、それはよろしくないということで丁寧にやっているわけですが、いかがですか。1回目、2回目とやってみて、あるいは、昨年からやってみて、そうした情報の部分が一番効いているのか、話し合いの部分なのか、これは両方です、複数ですということになるのかもしれませんが、現場でご覧になってどういった受け止めをされているのか、個人の感想で構いませんので教えてください。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） まず、第1回目と第2回目を比較しますと、1回目は2回目よりも情報提供で意識がもう少し変化しました。1回目は、やや一般的なテーマ設定といたしましうか、情報提供によって変わり得るような議論のテーマだったと思うのですが、2回目は、論点がもう少し深いところにありまして、1回目と同じような財政的な制

約や人手不足というようなデータをお示ししても、生活道路への雪対策に関しては少しびんとこないというか、意識がほとんど変わっていないことが分かっております。ただ、それらを踏まえて最終的に議論すれば、雪対策や生活道路への意識が変わったというのが2回目の結果だと受け止めております。

ですから、情報提供で変わり得るテーマもありますし、議論をもう一步深めるには、やっぱり対話によるところが大きいというふうに分けて考える必要があると思っております。

それから、財政的な制約や人手不足というのは毎回お示ししておりますけれども、今回、2回目の議論を観察していて、先ほども梶井委員からご意見がありましたが、公平性とか平等に関するご意見もかなり見られたと思っております。

例えば、パートナーシップ排雪に関しては、実施しているところと実施していないところの費用負担とか、町内会に加入している人と加入していない人の費用負担というふうに、第2回のほうが視点としては、平等、不平等といった観点を皆さんもお持ちになられて、その上で議論された結果ではないかと感じております。

○山崎委員 ありがとうございます。

○梶井委員 今の件は、2回目のほうが10代が多かったことと関係しますか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 実は、10代、20代の方々というのは、シナリオでいうBを選ぶ傾向が最初は多かったことが分かっております。

これは、恐らく、普段は除雪に関わらないとか自分は雪かきをしないということもあると思うのですが、パートナーシップ排雪という現状維持の選択肢を選ぶ方々が10代、20代の方で多く、最終的にはその方々がCに移行したことが最終的な違いを生んだ要因ではないかと考えております。

○山崎委員 行政と住民との関係で言うと、一方では行政の役割を期待しながら、他方では自分たちでできることは頑張りましょうみたいな両方が出てくるというのは、ここでの議論には出てきていないかもしれませんが、パートナーシップ排雪はやめましょうとか、今回のように試行をしましょうとか、そういう流れになっていて、そこは、当然、今まではパートナーシップ排雪を町内会でやっていたのが行政に引き上げられるわけだから、役割が増えるし、それはそれとして、でも、何でもかんでもやっただけではなく、やれるところというのが、ゼロサムではなくて両方が並立しているというのは、決して相矛盾するものではなく、非常に建設的な組合せの仕方として現象に出てくるのは分かりました。

もう一つお伺いしたいのは、タイミーでのマッチングもこんなに試験的な取組で4人ずつ集まるのかと驚きでした。可能であれば、世代とか、ご職業とか、どういった方が応募されたのか、具体的に教えてもらえると、今後の議論の発展にもつながると思いますのでお願いします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） いろいろな世代の方から応募がありまして、男女の別でも偏りはあまりありませんでした。

それから、当日、その方々にヒアリングをしましたら、短時間で割といいアルバイト料金といますか、2時間で2,700円という設定で、そこに惹かれたというような声も聞かれました。2時間の雪かきをしたり、砂をよけたりする単純作業で2,700円もらえるということに価値を見出されたというところも大きかったのかと思います。

○鈴木座長 ただいまのお話ですが、実際に出された意見に対して試行的にやってみたということで、非常にすばらしい取組であったと私も思っております。

年代の話もございましたけれども、まさしく隙間の時間に、できる時間のできる範囲でできることをやるということで、その表れにもなっていると思っております。

今後は、こういうスキマバイトだけではなく、いろいろな形で少し試行的に、出された意見に対して可能な範囲でやってみて、それを積み重ねていくことが重要と思っております。

ついでで申し訳ないのですが、先ほども年代の話がございましたように、また、資料2ページにも概要がございます。今後、どこまで分析するかということはあると思いますが、サンプル数からすると、統計的にはなかなか難しいのかもしれませんが、属性といますか、個人の置かれた環境や年代も含めて「どういった考えをお持ちなのか」「どういった変容があったのか」といった点も、少し分析できると興味深いのかなと思っております。

そのほか、何かございませんか。

○三上委員 2点だけです。

1点目は、梶井委員がおっしゃっていた「行政が中心」という部分です。

当日、私は見ていたのですが、アイスブレイクというか、皆さんがまず集まって、今年の大雪の状況について「いろいろと大変だよ」と話していた関係もあって、平等性ももちろんあると思うのですが、通常時の対応について議論をしましょうという前提であったとしても、今年の大雪でかなり手ごわい状況を目の当たりにし、リアルに体験したので、自分たちでやりたいけれども、ここまでの雪だったら、やっぱり行政に頼るといった安心感もあって、その結果、変化が出てきたのかなという気はしました。

もう1点、いろいろなご意見が出ていましたけれども、2回目のワークショップの手法の話でいくと、後半の多世代でのグループワークにおいては、普段の生活についての共有は非常にしっかりされていたと思いました。

事前の打合せにおいて、札幌市からファシリテーターに対する依頼の中で、ワークショップで議論をする前に、まず、個人の時間を大事にして個人で考えさせてくださいとお願いした結果として、個人の時間を5分くらいしっかりと取ってからグループワークに入っていたからです。前回の1回目のときは、ファシリテーターによって、「この議論についてどうですか」と少し時間を取っていたものの、すぐに「どうですか」とただ当てて行く形が多かった状況でした。そうすると、自分の考えがまだ整理されず、自分の思いがしっかり言語化できていない段階でほかの人の意見がどんどん出てきて（耳に入ってきて）しまったので、「いや、私もそう思います」といった同意で流れるケースも見られ、本当の意見が引き出せていなかったグループもあったのです。

今回は「まずは皆さんで考える時間ですよ」と静かな時間を取って、個人の意見をしっかりと書いてもらった上で、グループ内に意見を出してもらったので、同世代もそうですが、多世代のときには、それぞれの意見が場にちゃんと提供された上で、「そういうことなんだね」と一回受け止めた上で議論をしていました。そして、それぞれの生活スタイルを受け止めた上で、「それだったら自分たちでやらなければいけないね」といった積極的な議論というか、前のめりな議論が若い人も尊重されてできていたと思います。その結果、おとなしめと言ったら変ですけども、理解のある結論に集約されていたような気がします。決して、ファシリテーターがそちらに寄せたわけでもなく、大人が「いやいや、そうじゃなくて」といった大きな対立も出ず、自然な流れで議論が進められていた気がします。

私としては、そこでもう一丁、対立をあえて起こすという問いをかけたりして、少し揺さぶって「本当にそうなのか？」というワンフェーズが、もしかしたら必要だったのかもしれないなとも思いましたが、予定調和に行ったわけではなく、しっかりと受け止めた上で行われていたという感じがしましたので、やはり、テーブルファシリテーターに統一して個人の時間を取ってくださいと、札幌市がしっかりと指定したことが、かなり大きかったのではないかと思います。

○鈴木座長 ワークショップの様子なども含めて情報提供をいただき、ありがとうございます。ほかに何かございませんか。

○片山委員 前回、私はお休みをしていて情報共有ができていないところもあるのですけれども、水準を抑制したとありますが、皆さんはどのくらいの水準を前提にアンケートに答えていたのでしょうか。今年のような水準を抑制した行政による排雪として受け止めた上で、今年ぐらいでと考えていたのか、それとも、今後は今年以上に水準が抑制されるという前提だったのか、その辺はお分かりになりますか。

○オブザーバー（玉上計画係長） まず、今冬の大雪の排雪作業の水準かどうかというご質問ですけども、今冬の大雪への対応については、スピード感を重視して作業をさせていただいております。

実際には、業者の作業能力といえますか、もともとパートナーシップ排雪をやっている件数が多い業者は、機械もダンプも多かったものですから、比較的多めの量を持っていくことができました。一方で、パートナーシップ排雪の利用率が低いような地域は、ダンプも機械も手薄だったものですから、国や道からの応援もいただきながらやったのですけれども、必要最低限

の作業をしたエリアもあり、今冬の排雪作業については差が生じたのも事実でございます。

よって、住んでいる地域によって皆様の受け止めも変わりますので、今冬は大雪の対応ということで、その記憶や感覚は脇に一旦置かせていただき、資料を提示し、普段はパートナーシップ排雪をしたらこれぐらいの幅を取っていて、生活道路全線をやるとなると作業延長が延びてしまうため、それよりは少し抑制しないと作業がなかなか難しいというご説明を、このたび、札幌市側から情報提供としてさせていただきます。

何となく分かりましたでしょうか。

○片山委員 それであれば、T1の段階でグレーのCが23.3%に抑えられているので、皆さんも意外と理解されているのだなと思いました。もう少し、不満があつてここの部分が多くてもよさそうなのだと思います。

○鈴木座長 そのほか、何かございませんか。

○野田委員 今の片山委員のご意見にも関わりますけれども、まず、前回もそうでしたが、今回の調査も非常に面白くて興味深い内容だなというのが率直な意見です。シナリオを見せて、それをどう評価していくのかというのが、市民参加のすごく深いところに入っていったなと思いました。

一番興味深く見せていただいたのが、3ページの真ん中の一番上の折れ線グラフです。グレーのCがT2のときには4.3だったものがT3で5.2まで大きく変化しています。市民の意見がこんなに変わるの、やっぱり、情報提供があるなしで大分違うというか、民意はかなり流動的なのだなと思いました。こんなに変わるところがC以外はそんなになかったのですけれども、上がったりがつたりというのはございました。

さらに面白いなと思ったのが、5ページの真ん中の一番上の棒グラフを見ると、行政と地域で分担すべきがT1、T2、T3の全ての段階において、これは地域を中心が右なので、右から50%以上、要するに、半数以上の回答者が地域中心でいいという思いを持っているということです。

なおかつ、一番下のグラフでは、情報提供をどんどんしていくと、さらに協力思考になっていくということなので、行政だけではなく、市民が、地域が一定できる部分はやりますという意識が表れていると思います。

細かく見ると、先ほど、CがT3でぐっと増えるということですが、5ページの一番上のグラフを見ると、T2の段階で真ん中より左側のすごく地域志向になって、T3で地域志向が若干弱まっているという逆の動きをしているのが、今回、深く追求すべきポイントの一つかと思います。

これは、情報提供①のときに、今、行政は財政難で非常に厳しいですと言ったから、T2の段階で地域がもうちょっと頑張りますと回答して、T3の段階、要するに、情報提供②の段階では実際の排雪の課題を言っているの、パートナーシップ排雪もいろいろところで結構厳しいのですという情報を提供し、そのことによって、行政中心にという考え方もお金はそんなに使えませんよねということでCがすごく増えたと思えました。

そう考えると、今後、地域が関わらなくていいというわけではなく、地域は一生懸命に関わるのですけれども、パートナーシップ排雪の仕方の問題や、最初に梶井委員が言われたような地域間の格差の問題といった、パートナーシップ排雪のやり方の問題が提起されたのではないかと思います。

○鈴木座長 先ほどもわだちの問題についてありましたけれども、その辺ももう少し深掘りできればと思います。

そのほか、何かございませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○鈴木座長 それでは、議事(1)第2回市民ワークショップの結果についてはこれで終了させていただきます。

ここで、雪対策に関係する部署の皆様は退席となります。

お忙しい中をご参加いただき、ありがとうございました。

続きまして、議事(2)デジタルプラットフォームの検討状況につきまして、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 事務局の寺川でございます。引き続き、よろしくお願いたします。

資料2につきましては、雪対策から少し離れまして、デジタルプラットフォームの活用に向けた検討の状況についてご報告したいと思います。

背景としましては、第5次市民自治推進会議の答申において、活用を検討していくことが望ましいというご提言を受けておりますので、この間、実際に札幌市でもツールを使った実証実験や庁内での検討を進めてまいりました。

本日は、その状況についてご報告申し上げたいと思います。

左側の実験の概要をご覧ください。

まず、実証実験のご報告でございますが、Decidimとは、世界30か国以上で導入されているデジタルプラットフォームで、こちらを使用しました。市民がオンライン上で意見を投稿し、「いいね」や返信を行うことが可能になっております。

今年度は、筑波大学と協力し、同デジタルツールが市民参加に与える効果をA群とB群の比較によって効果検証する実験を実施したところでございます。A群は実際にDecidimを使っていた方々、B群は使わなかった方々で比較をするものでございます。

参加者の選出につきましては、無作為で市民2,000名に依頼を送ったところ、ちょうど200名から応募がありまして、グループ分けをし、各100名ずつという構成になっておりました。

札幌市では、この活用方法の検討を目的とし、次の時期・テーマによって運用を担当したところでございます。

この実験の調査につきましては、今、筑波大学のほうで取りまとめていらっしゃいまして、こちらの資料は札幌市として運用した結果をまとめたものでございますので、ご承知おきください。

まず、我々としては2期に分けて運用しまして、第1期は、8月から10月にかけて、これからの大通公園とごみ減量の二つのテーマでご議論いただきました。第2期は、12月から1月にかけて、新しい市民参加の仕組みというテーマでご議論いただいたところです。

両期間とも数か月間ありましたので、まず、情報提供をしたり、それに基づいて対話をしていただいたり、最後にまとめをして、それにご意見をいただいたりといった三つのフェーズに分けて議論が進行するように設計し、意見を収集したところでございます。

続いて、真ん中の運用の結果です。

第1期は実験期間に当たりまして、A群とB群で100名ずつに分けたところでございますが、A群で実際に登録があったのは括弧内の76名の方々です。投稿数は94件、「いいね」があったのが500回という結果でありまして、実際に投稿された方が38名でございました。

第2期は、実験期間を終えた後にB群の方も利用可能な期間として位置づけており、A群の方々に加え、B群の方々にも利用していただきました。B群の方々100名のうち、50名が実際に登録をされ、投稿数が43件、「いいね」の回数が166回という結果でございました。

投稿者は24名で、A群で3名の方が引き続き投稿していただいているので、差引き21名がB群の方々でございます。実際に登録された方のうち、いずれも4割から半数ぐらいの方が投稿されましたが、それ以外の方は、見ているだけなのか、あるいは、「いいね」をしたりという方もいらっしゃいましたし、投稿しただけの方も恐らくいらっしゃったのではないかと考えております。

その下のコメント投稿数の推移ですが、図でお示ししておりますのは第1期の投稿数の推移です。

ご覧のとおり、左側が利用開始で、この直後に投稿がかなり多くあったのですが、次第に減少し、停滞するような傾向もございました。メールのマークは、事務局において、このツール外で参加を促す工夫ができないかと考え、例えば、フェーズの切替えの際などにメールで投稿呼びかけの通知をした結果、通知後に投稿が少し増えるという傾向が確認できました。これは第2期においても同様の結果だと言えます。

その下の投稿時間帯につきましては、12時から15時のお昼の時間帯と18時から21時の夕方から夜にかけての時間帯での投稿が多く見られましたが、深夜や早朝のコメントも見られたところです。

次に、右上ですけれども、参加者の意見を参考にご紹介しております。

例えば、時間があるときに答えやすい、手軽に参加できるといった肯定的なお声があるほか、アンケート形式など気軽に参加できる工夫が必要、「いいね」以外のリアクションの方法が欲しいといったご提案、また、操作方法が分かりづらい、通知機能が欲しいといった改善を求める声もございました。

このうち、通知機能に関しましては、例えば、スマホのアプリのようなプッシュ通知をイメージされていると考えられ、現状ではこういったものがないので、わざわざ自分からサイトを見に行かないと分からないのが不便であるという趣旨のご意見でございます。

その下は、第2期の我々の市民参加のテーマの最後に今後の市民参加の方向性に対するアンケートを取った結果です。

今後の市民参加の取組の望ましい方向性につきまして、Aがデジタル重視（積極的にデジタルを活用）、Bがバランス重視（デジタルとアナログのバランスを取る）、Cが対面重視（対話を中心とする）の3択で調査をしました。

結果としましては、Aのデジタル重視が50%、Bのバランス重視が50%で、いずれにしてもデジタルを活用していくべきというお考えの方々が多かったという結果になっております。

また、現在、我々のほうでまさに取組を進めております新しい市民参加の仕組みづくりについても情報提供をしており、この評価については、よい、または、とてもよいという評価が97%でした。

右下に運用を通じて確認した効果を3点まとめております。

まず、時間や場所に縛られず参加することができることから、市民参加の入り口として機能し、対面では届きにくい声を集める手段になり得ると考えております。2点目に、投稿はしないけれども、閲覧や「いいね」はする、アンケートには回答するといった多様な参加形態があることを確認しております。3点目に、メールによる働きかけは投稿を促進する傾向があることが確認できたほか、庁内的には運用のノウハウがこの2期を通じて蓄積されたと考えております。

2ページ目に移りまして、こちらは庁内での活用に向けた検討の結果をまとめたものでございます。

まず、左側の庁内ワークショップによる検討の欄をご覧ください。

こちらは、庁内での意見収集などを進めるために、国のデジタル実装伴走支援事業が実施されておりまして、国の委託したデジタル分野の専門家が課題の整理や導入するサービスの選定などをサポートしてくださる事業ですが、これを活用し、国の委託事業者のファシリテートの下、庁内での検討会を2回実施しました。

その結果を取りまとめたものが、太字の必要な機能要件です。

4点ありまして、まず、1点目が「いいね」・返信による双方向のやり取りが可能であること、2点目がログイン不要で利用できること、3点目が新着情報を知らせる通知機能です。これは、利用者側からもご意見がありましたし、我々としても必要な機能だと考えております。4点目が柔軟にページを編集できる機能ということで、ツールによってはこちらの思うとおりの編集ができなかったりしますので、そのあたりの柔軟性が必要だという意見でございます。そのほかにも、各部署がいろいろな用途で使用していく可能性がある中で、そういった用途に耐え得るツールが望ましいという意見も出されておりました。

その下に、国の委託事業者からの提案ということで2点の提案をいただいております。

1点目は、庁内のツール導入の目的を明確にし、機能の条件をさらに整理すること、2点目は、整理した条件を基にシステム事業者へ詳細を十分に確認していくことでございます。

それから、中央の上段では、先ほどの運用から得られた知見と庁内での議論によって得られた知見と課題を3点に整理しているところでございます。

1点目は、操作方法について改善を求める意見が寄せられたことで、操作が難しいと感じて利用を断念するおそれがあるという課題がございます。

2点目は、投稿者が一部に限られていたものの、「いいね」やアンケートのみの回答といった多様な参加形態が確認されましたので、文章入力以外の参加手段の充実が求められております。

3点目は、情報提供やメールでの呼びかけの後に投稿が増加する傾向が確認されました。もちろん、ツールにそういった機能があればいいのですが、こうしたことが継続的な参加を促すための工夫につながると考えております。

その下に課題解決に向けた方向性ということで3点まとめております。

1点目が操作性の向上、2点目が多様な参加方法の実現、3点目が議論を活性化させるための設計というふうにとまとめているところです。

最後に、右側の今後のデジタル活用に向けてです。

まず、デジタルプラットフォームは、市民参加の入り口として参加のハードルを下げる効果が期待できると考えております。しかしながら、導入に向けた課題も運用して明らかになってまいりましたので、全庁的な行政サービスのスマート化も踏まえながら、解決策について引き続き検証していく必要があると考えております。

今後、ツールの機能要件などの具体化に当たりましては、庁内的に求められる機能の整理やシステム事業者へのヒアリングなど、一連の事象によって得られた知見を活用して検討を進めてまいりたいと考えております。

ご報告は以上でございます。

○鈴木座長 ありがとうございます。

ただいまのご説明に関しまして、皆様からご意見やご質問がございましたらお願いいたします。

○片山委員 ご説明をありがとうございます。一つ教えてください。

投稿者数の38名とか24名というのは延べ人数ですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 延べではなくて実人数です。

○片山委員 76名に対して38名、50名に対して24名と、ちょうど半数ぐらいつづが投稿したのですね。ここがどういうホットなコミュニティになっていたかが重要だと思います。次のページを見ると、番号がそれぞれ振られるというか、市民Aさんはずっと市民Aさんで、市民Bさんはずっと市民Bさんなのですね。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） ニックネームをご登録いただく仕組みで、実際には、資料上の市民Aはニックネームに置き換わるイメージです。

投稿者数38名ということで、ほとんどの方は初期に1回コメントをして、その後は見られなくなる方が多かったという傾向があります。ただ、コメントを引き続き何回もくださる方や、A群の方でも第2期にまたコメントをくださる方もいらっしゃいまして、こちらがコメントを呼びかけますと、都度、それに応じてくださる方々や、自分で何回も画面を見に行き自主的に投稿してくださる方も一定数いらっしゃいました。

○鈴木座長 野田委員、お願いいたします。

○野田委員 これには私も若干関わっていましたが、背景のお話をさせていただきたいと思っております。

もともとは、私も参加していた大学の研究者グループにおいて、シビックテックという市民側の技術を利用して市民参加を促進する研究を、民間の補助金を活用して実施しようとしていました。最終的にはメンバーである筑波大学の河合准教授が、別の補助金を活用して実証実験を行うことになり、実践などの協力をしてくれるところを探していた際に、当時の市民自治推進課の担当者から、加古川市で導入しているDecidimを市民参加の仕組みの検討のために札幌市でも活用できないかという相談がありました。そこで、私の方で札幌市と河合准教授をつないだという経緯がございます。

決して、札幌市が将来的にこれを絶対に導入しなければならないといったものではなく、今回の実証実験にあたっては、研究目的であればDecidimの利用料も数万円程度の安価な金額で利用でき、全て研究費で負担するという話でしたので、研究のためには良いと思っておりました。

ただ、Decidimは元々スペインで開発されたもので、ライセンスを得て運用しているため、行政が利用する場合は、結構な費用を払わなければならないという点については、皆さんにもご認識いただければと思います。

それから、昔から電子掲示板なども結構あるのですが、それとDecidimの違いは何かというと、議論がいろいろなテーマで活発的になされるときに途中でアンケートを行う機能もある

し、過去にどういう発言でどういう文脈でどうなったのか、過去のものを参照できるので、通常の電子掲示板よりはるごくシステマチックになっているというメリットがあることです。

ただ、今回見てみると、そんなに発言がされていないので、何かの補完のために意見募集程度であればいいと思いますけれども、これで意見をどんどん集めるためにはほかの工夫も必要なのかなと思いました。

補足情報としてそこをお伝えしておきたいと思います。

○鈴木座長 背景等につきまして情報提供をいただき、ありがとうございます。

そのほか、何かございませんか。

○梶井委員 このツールを市民参加の入り口として活用できないかというお話でした。

入り口として活用するかしらないかは次の段階でご判断いただきたいと思いますけれども、入り口として活用するのは、いいにつけ、悪いにつけ、ありだとしても、その先に、やはり、札幌市としてどのような市民参加を目指していくのか、そこがないと、ただ入り口を広げる、デジタル化するというだけではやっぱり不足で、その後、どういう市民参加が求められているのかというところまで考えた上での入り口であってほしいという感想を持ちました。

○鈴木座長 一つ質問ですけれども、閲覧に関しては一番の入り口になると思います。その次に「いいね」があって、投稿というレベル感があると思うのですが、閲覧に関して、回数や時間などはログを取って分析されているのでしょうか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 今回、どれぐらいの方が閲覧しているのかは、分析のツールで確認することができまして、傾向としては同じで、最初のほうは閲覧が多いです。ただ、毎日観測しておりましたら、定期的に5人から10人ぐらいの方がページを訪れていたことが分かっています。

○鈴木座長 山崎委員、何かございませんか。

○山崎委員 だんだん分かってきたのですけれども、これは巨大なLINEとどう違うのかなと。2ページのイメージ図のようにコメントが出てくるということで、だんだんイメージができてきましたし、みんながそれぞれに意見を言うというのは分かりました。

ただ、市民同士で意見をやり取りしたり、いわゆるディスカッションになり得るのか、そうしたものではないというふうに割り切らなければいけないのか、その辺についてご説明をお願いします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 本来は、参加者同士で議論を深めていただくためのツールだと理解しておりますが、今回試行してみて分かったのは、そこまで利用者同士の意見の交換は見受けられなかったところがございます。LINEとどう違うのかと言われますと、意見収集という意味では、LINEで意見を言っていたのとあまり変わらないのかなというのが率直な印象です。

○山崎委員 建設的な議論を深掘りしていくとなると、やっぱり、ある種のファシリテーターというか、コーディネーター役の人がどうしてもどこかで必要になってきますので、そこは今後の課題ですね。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 補足としまして、我々事務局もコメントがあれば回答していくスタンスを取っておりました。第1期は、担当課に返答を考えていただいて、第2期は、当課においてほとんどのコメントに回答しました。そういう意味では、参加者と行政のやり取りは頻繁に見られましたが、参加者同士の意見交換はあまりなかったということがございます。

○鈴木座長 では、大村委員、お願いいたします。

○大村委員 このプラットフォームでのやり取りの最初のきっかけがどういうふうに始まるかが気になったのです。例えば、第1期のこれから大通公園とかごみ減量の取組というテーマに対して、情報提供とか、上のほうからの投げかけとか、最初の投稿はどのようなものになるのでしょうか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 参加の呼びかけのイメージとしましては、依頼のときに、ごみ減量とか大通公園の在り方についてご興味があればぜひ参加してくださいということが入り口でした。

実際に始まってからは、イメージとしてはブログみたいなものを思い浮かべていただいて、

上部に札幌市からの情報提供、例えば、画像や資料をつけて、まずはそれを読んでいただき、それに対するコメントをもらうという形式です。

例えば、大通公園ですと、これまでの公園の歴史を情報提供し、大通公園にどんなイメージを持っているのか自由に意見をいただいたり、これからの大通公園の姿として、日常利用や大型イベントなど様々な姿がありますけれども、こういった方向性がいいかという投げかけから、ご意見をいただくという流れです。

私どもで行った市民参加の仕組みにつきましても、これまで取り組んできた市民参加の仕組みづくりの実証等について情報提供し、それについて意見をいただいたところでございます。

○大村委員 イメージできました。ありがとうございます。

○鈴木座長 そのほか、何かございませんか。

○三上委員 すごくチャレンジングで、いいなと思います。

多分、SNS依存というか、「いいね」を欲しがる人、それから、SNS疲れの「いいね」をもらえないと不満になる人、このあたりをどうハンドリングするかだと思います。取っつきやすいのですけども、顔の見えないやり取りに変わりはないので、先ほど梶井委員がおっしゃっていたように、その後、どういう参加の在り方にしていくのかということかと思いました。

また、深く促進するためには、場が荒れないようにコメント欄をフラットにハンドリングすることも必要だと思います。先ほどの山崎委員のお話のように、議論を深めれば深めるほど、対立ももちろん出てきますし、その辺がうまくファシリテーターがここに入っていくと面白いと思います。

いずれにしても、限界があることを分かった上で、次の段階に、リアルな、先ほどのワークショップなどにしっかりとつなげていくのがいいのかなという感想です。

○鈴木座長 そのほか、何かございませんか。

私から質問ですけれども、今回、デジタルプラットフォームの活用に向けた検討ということで、今回このように実験をしてみたことは非常にすばらしいと思いますが、この後はどのように考えていかれるのか、札幌市の考え方をお聞かせください。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 今年度、実際に使ってみたり、庁内ワークショップを行った結果、課題がいろいろと見受けられたということで、具体的にいつ導入するかという話をするのはまだ早いと考えておまして、引き続き、課題の解決に向けて検証を進めながら、繰り返しになりますけれども、行政サービスのスマート化という全庁的な流れもありますので、どのようなツールがいいのかというあたりも含めて検討していきたいというのが現状の考えです。

○鈴木座長 それでは、ほかのツールの情報も集めつつ、先ほど梶井委員からありましたように、その先にどのような市民参加を目指すのかということも重要だと思いますので、その辺も見据えつつ、どのようなツールがいいのか、引き続き検討していくということでよろしいですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 左様でございます。

今回、我々はDecidimを使いましたが、庁内にはほかのツールを使った実績もございまして、ツールとしてはこれからもいろいろと進化していく分野かと思っておりますので、それらもにらみながら検討を進めていきたいと考えております。

○鈴木座長 今後はデジタル社会ということもございまして、今回の参加者アンケートでも見られていますけれども、デジタルとの融合といいますか、その辺は目指していくべきだと思いますので、引き続きよろしく願いいたします。

そのほか、何かございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○鈴木座長 それでは、（２）デジタルプラットフォームの活用に向けた検討状況についてはこれで終了させていただきます。

続きまして、（３）市民参加を推進するためのガイドラインにつきまして、事務局よりご説明をお願いいたします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 資料３に基づいてご説明させていただきます。

こちらは、答申を踏まえて、これまで１年ほどかけて実証を進めてきましたほか、今後のガ

ガイドラインの策定スケジュールについてご説明申し上げるものでございます。

左側のこれまでの実証の取組をご覧いただければと思います。

委員の皆様もご承知のとおり、様々な取組を試行してきたところでございます。アンケート調査、大学生を対象としたワークショップ、市民ワークショップも行い、先ほどご説明申し上げましたデジタルプラットフォームの検証など、様々な取組を進めてまいりました。

これらは、第5次市民自治推進会議からいただいた答申内容を具体化するのが目的でございます。これらの取組から得られた知見を基にガイドラインの策定に向かっていきたいと考えております。

右側のガイドラインの策定に向けたスケジュール等をご覧いただければと思います。

今後は、複数の検討過程を経ながら作成を進めてまいります。

まず、当検討会における検討につきましては、今回は5月中に開催を予定しておりますが、次回会議におきまして、ガイドラインの基本的な方向性の整理、取りまとめを行って終了とさせていただきますと考えております。その後は、6月以降に設置を予定しております第6次市民自治推進会議に議論を引き継ぎ、具体的な内容のご議論をいただきたいと考えております。

並行しまして、庁内においても運用面から検討を加える必要があるとともに、アンケートやワークショップなどを通じて多方面から意見の収集を進めていく必要があると考えております。

最終的には、これらの検討結果を統合し、令和9年2月以降に策定を目指していきたいと考えているところでございます。

下段の策定に向けた視点をご覧ください。

今回、実証から得られた知見に基づき、意見収集や議論の手法の活用場面や留意点を整理していきたいというのが1点目です。それから、実効性を高めるために、外部委員の視点に加えて、庁内においても運用面を考慮した検討を行っていく必要があると考えております。最後に、策定のプロセスそのものに市民の声を取り入れ、市民参加を実践していく必要がありますので、これらの視点を意識しながら策定を進めてまいります。

事務局からの説明は以上でございます。

○鈴木座長 ただいま、市民参加を推進するためのガイドラインの策定スケジュール等についてご説明いただきました。

ただいまのご説明に関しまして、ご質問やご意見等がございましたらお願いいたします。

○三上委員 気になったのは、庁内の運用面から検討を考えることが結構大切なことだと思います。ガイドラインは多分いいものができるのですけれども、今回も後ろの作業を何度か見ていて、その運用が結構大変だったのかなと思いましたが、庁内でどう活用するか、その運用に誰がどう関わるか、その辺のハンドリングも大変でしょうから、そのパターンをうまく作ればいいのかと思います。

庁内でプロジェクト的いろいろな部署の方が、例えば宣伝の部分は広報とか、そのプロジェクトの固まり方というか、案件によってどういう体制を組むかということです。そこでスムーズな横のつながりもできるでしょうし、市民への伝え方をどうするかについても知恵が絞られるのかなと思います。

運用面で、ぜひ頑強なものにというか、強力なものをやっていただけると、我々が今まで温めていたものがどんどん活用されると思いますので、よろしくお願いします。

○鈴木座長 ご意見を賜ったと理解しておりますけれども、何かコメント等はございませんか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） ご意見いただきましたとおり、ガイドラインがいくらよくても、実効性が担保されないことにはうまくいかないということを念頭に置きながら策定を検討してまいりたいと考えております。

○鈴木座長 そのほか、何かございませんか。

では、私から一つ質問をよろしいでしょうか。

まだはっきりと決まっていないのかもしれませんが、資料3の検討の段階の4番目に意見の収集等というものがございます。この中で、アンケートやワークショップ等を通じて意見を収集とございますけれども、これまで第5次市民自治推進会議では成人式をテーマにいろいろと

検討してまいったと思いますし、現在、この検討会におきましても雪対策ということで、テーマを具体的に設けて検討してきたとっております。

第6次市民自治推進会議での内容にはなるとは思いますけれども、これまでのように具体的なテーマ設定をした上でガイドラインを検討していくのか、バランスもあると思いますけれども、ガイドラインの内容そのものについて検討していくのか、もしお考えがあればお聞かせいただきたいと思います。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 成人の日の行事や雪対策の在り方検討とはまた違った性質のものだと理解しております、どういうテーマの設定が必要なのかはこれから考えていかなければならないとされているところがございます。

いずれにしても、考え方としては、このガイドラインが本当に市のためになっていくのか、市民の意見を収集し、それを市政に反映するのが目的ですので、それに資するものになっているかという観点からご意見を頂戴することが基本的な考え方だと理解をしています。

○鈴木座長 ありがとうございます。

そのほか、ただいまのご説明に関してご質問やご意見等はございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

2. その他

○鈴木座長 最後に、全体を通して皆様から何かございませんか。

全体を通してお気づきの点やご意見、ご質問、また、今後に向けて、次回は5月に開催予定とのことですけれども、次回に向けてご意見等がございましたらよろしくお願いたします。

○梶井委員 今回の市民ワークショップで使ったシナリオがすごくよくできているのです。豚の貯金箱で財政面を示すイラストもすごくかわいかったし、あれは民主主義を育てるための一つのツールになっていると思ったので、ぜひ小学校から使ってほしいです。雪対策なんかはあのまま使えると思います。そして、小さい頃から、雪はどうしたらいいのだろうか、隣のおばあちゃんの家のお雪について自分たちは何ができるだろうか、あれはあのまま使えますよ。本当に民主主義教育のツールになると感じたところです。

○鈴木座長 非常に重要なことかと思えます。

今回のご説明にもありましたけれども、第1回目と第2回目を比較しまして、情報提供に関して、雪対策という専門的な部分も入ってくる中で、いかに分かりやすく説明するのかということで、イラストやシナリオも含めて非常に分かりやすく工夫されたことに敬意を表しますし、あわせて、アンケート結果を見ると、分かりやすくなったということで、ここにも影響したとっております。

引き続き、ガイドラインの中で具体的に表現するのはなかなか難しいかもしれませんが、市の姿勢として努力をするということも盛り込んでいかなければいけないと思います。市民に寄り添うことにもつながると思いますし、的確な情報提供ということにもつながると思っております。

そのほか、全体を通して何かございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○鈴木座長 ご意見、ご質問等もないようですので、これにて終了させていただきます。

先ほどの事務局のご説明にもありましたように、次回、5月に開催予定の第6回が本検討会の最終回となる予定です。これまで議論してきた実証の取組の成果をガイドラインの基本的な方向性として整理し、策定に向けて次の段階につないでいければと思っております。

◎閉 会

○鈴木座長 それでは、以上をもちまして第5回検討会を終了させていただきます。

本日は、年度末のお忙しい中をご参加いただき、誠にありがとうございました。

以 上